

奈良県御所市

佐田遺跡 7次 発掘調査報告

奈良女子大学蔵書



95100294100X

平成5年(1993年)1月

210.2

95

御所市教育委員会

奈良県御所市

佐田遺跡 7次 発掘調査報告

平成5年(1993年)1月

95100294

御所市教育委員会

例　　言

1. 本書は、御所市立島上中学校の体育館建て替え工事に伴い、御所市教育委員会が実施した、佐田遺跡第7次発掘調査の報告書である。
2. 本遺跡は『奈良県遺跡地図』第3分冊、16-D-2に該当する。
3. 現地調査は、御所市教育委員会・藤田和尊が担当し、井戸木徳治郎、角南義則、小出義弘、米田文子、西本大春、松尾弘海、森田利昌の参加・協力を得た。
4. 調査期間は、平成4年7月28日から8月5日まで（実働5日間）であり、調査面積は280m²である。
5. 遺物整理および本書作成には、藤田のほか、尼子奈美枝、藤村麻子、高田加容子、尾上昌子、木村美幸、長越和世、藤井浩子があたり、御所市教育委員会技術職員・木許守の協力があった。
6. 出土遺物実測図の縮尺は1/3に統一した。文中の遺物番号は、挿図・図版中の番号ともすべて統一した。
7. 製図および写真撮影は、現地関係を藤田が、遺物を尼子が担当した。
8. 本書の執筆分担は以下に示す通りであり、編集は尼子が行った。

本文目次

1. 位置と既応の調査	(木許)	1
2. 調査の契機と経過	(藤田)	3
3. 調査の方法	(藤田)	4
4. 層序と旧地形	(藤田)	4
5. 出土遺物	(尼子)	7
6. まとめ	(藤田)	12

挿図目次

第1図 調査地位図 (S.=1/5000)	2
第2図 トレンチ配置図	5
第3図 第1トレンチ 北・南壁 上層断面図	6
第4図 第1トレンチ 出土遺物 (1) (S.=1/3)	10
第5図 第1トレンチ 出土遺物 (2) (S.=1/3)	11

図版目次

図版 1	佐田遺跡周辺航空写真 (東から)
図版 2	1. 調査地全景 (調査前; 北から) 2. 第2トレンチ全景 (西から)
図版 3	1. 第1トレンチ全景 (東から) 2. 第1トレンチ全景 (西から)
図版 4	第1トレンチ 出土遺物 (表)
図版 5	第1トレンチ 出土遺物 (裏)

1. 位置と既応の調査（第1図）

御所市は、奈良盆地の東南部に位置する。西部には葛城山・金剛山が、南部には亘勢山丘陵が、東部には国見山などがあり、市域の北半部のみが盆地の平野部の一画を占める。

佐川遺跡は、標高150～190mの金剛山東麓部に位置する。遺跡が立地する地点は、御所市と五條市の市境となる風の森峠から北に下る谷筋を挟んで、亘勢山丘陵と対峙する位置となるが、この丘陵には、総数800基以上と推定される亘勢山古墳群が造営されている。

また、遺跡は、金剛山に源を発して東流する百川・竹田川の2本の河川に、南北を挟まれた尾根上に立地する。ただし、微視的にはこの尾根上にもまた東西方向に伸びる数本の谷地形がみられ、微地形としてはこれらの谷地形によって区画されるようである。

さて当遺跡については、平成5年1月現在、7次にわたる調査が行われている。

それらの調査は、第4次調査および今回の第7次調査を除いては、いずれも個人住宅の建築に係る事前の発掘調査であり、その調査の規模も小さいものであった。それぞれの位置関係については第1図に示した。

第1～3次調査地は近接する地域に所在する。第1次調査では、耕作土下で地山がみられ遺構・遺物は全く認められなかった。

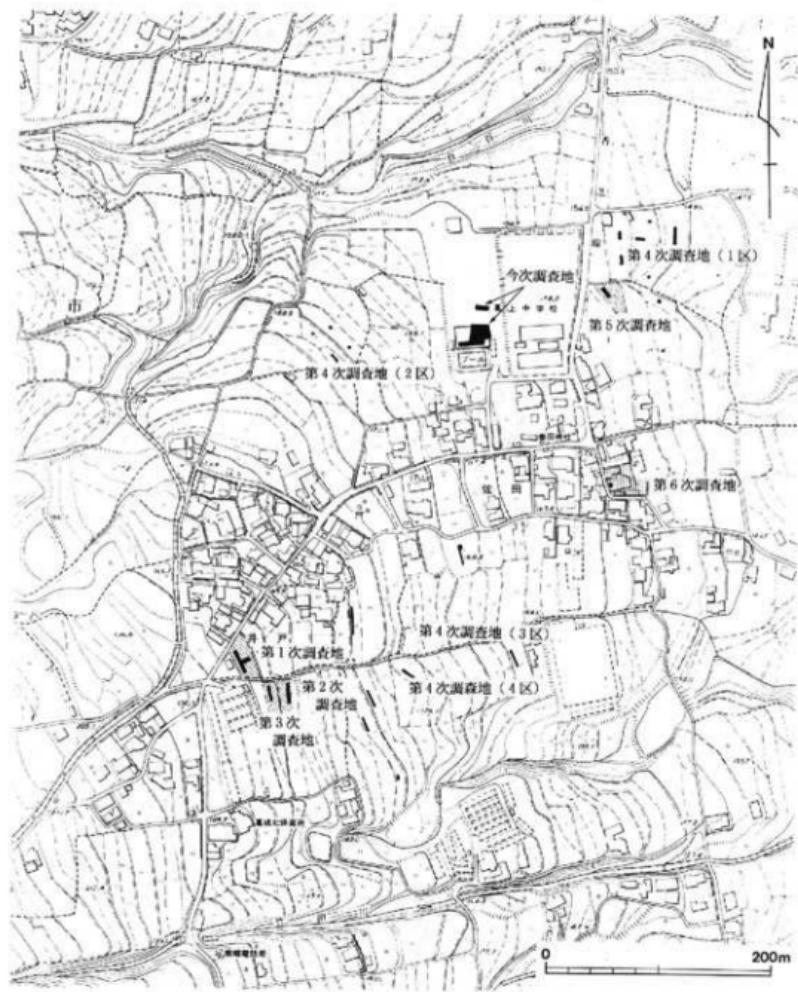
第2次調査⁽¹⁾・第3次調査⁽²⁾でも上の堆積状況は同様であり、遺物は第2次調査で耕作土内からサヌカイトフレークが1点出土したのみ、第3次調査で同じく耕作土内から、須恵器小片・磁器小片各1点が出土したのみであった。

第4次調査⁽³⁾は、平成3・4年度の国庫・県費補助を受けて実施した、遺跡範囲確認調査である。平成3年度は、今次調査地の東側・西側のそれぞれの地区で、合計11箇所のトレンチ調査を行った（第4～1次調査）。結果的には、遺物包含層は認められたものの、遺構は検出されなかった。また包含層出土遺物については、古墳時代から奈良時代に至る須恵器・土師器が混在しているトレンチも散見され、遺物は西側の高所から流れてきたものと判断された。

第5次調査地⁽⁴⁾は今次調査地東側の地点である。耕作土・床上下に遺物包含層が認められた。この直下は地山となるが、遺構は認められなかった。遺物は布留式期の高杯を1点検出した。

第6次調査地⁽⁵⁾は、第5次調査地の南に位置する。当該調査は住宅建築に係る事前調査であったが、既設建物撤去後の地表面は数cmで地山となっており、遺構・遺物は全く検出されなかった。

以上のように、当該遺跡では、今までのところいずれの地点においても遺構は検出されていない。特に遺跡範囲の縁辺部に位置する第1～3調査地は、調査の結果からも遺跡の中心から外れているものと判断してきた。ただし、地点によっては遺物包含層は確実に存在しており、当遺跡の性格についてはなお追究されるべき点が多くあるといえよう。



第1図 調査位置図 ($S = 1/5,000$)

2. 調査の契機と経過

平成4年6月17日付け、御教總第720号で御所市長 芳本甚二氏より、御所市佐田1番地 葛上中学校地内の体育館の建て替えに伴い発掘通知が提出された。当該地は佐川遺跡の範囲内であるので調査が必要と判断される旨を意見書に記し、平成4年6月19日付け、御教社第179号でこれを奈良県教育委員会文化財保存課に進呈した。

対して、同年7月21日付け、教文第2326号の2で当該地の取り扱いに関する通知があったので、同年7月24日付け、御教社第214号で埋蔵文化財発掘調査の通知を提出して調査を実施することとした。

調査は同年7月28日から8月5日まで実働5日間にわたって実施した。調査面積は、既設体育館の建っていた上段の部分に第1トレンチとして掘削した270m²に加え、新設体育館の建築に伴い拡張される下段のグラウンド部分に第2トレンチとして設定した10m²の合計280m²である。

調査日誌抄

- 平成4年7月28日 現地作業初日。機材搬入。
- 7月29日 第1トレンチを Yunpo により掘削。既設体育館の基礎工による搅乱部分の排除。包含層一部掘削。
- 7月30日 第1トレンチ、Yunpo にて包含層掘削。夕刻、地山全面に出る。壁面精査。第2トレンチ掘削、終了。
- 7月31日 壁面精査。断面土層図作成。全景写真撮影。
- 8月5日 撤収。埋めもどし。本日で現地作業終了。

3. 調査の方法 (第2図)

既設体育館のあった部分は、西から東への傾斜地を切る工法で平坦面を造成しているため、西側は削平が著しいことが予想できた。このため、敷地を東西に横断するかたちで、まず幅1.5m、長さ（東西）28.2mのテストトレンチを設定、包含層の遺存している部分を確認して後、これを拡張し、第1トレンチとした。

第2トレンチは、第1トレンチを設定した既設体育館部分よりもさらに一段下がった、現在、グラウンドとして使用されている箇所に設定したもので、新設体育館の基礎工事が及ぶため急のため掘削したが、予想通り削平著しく、2cmの盛土の下はすぐに地山であった。

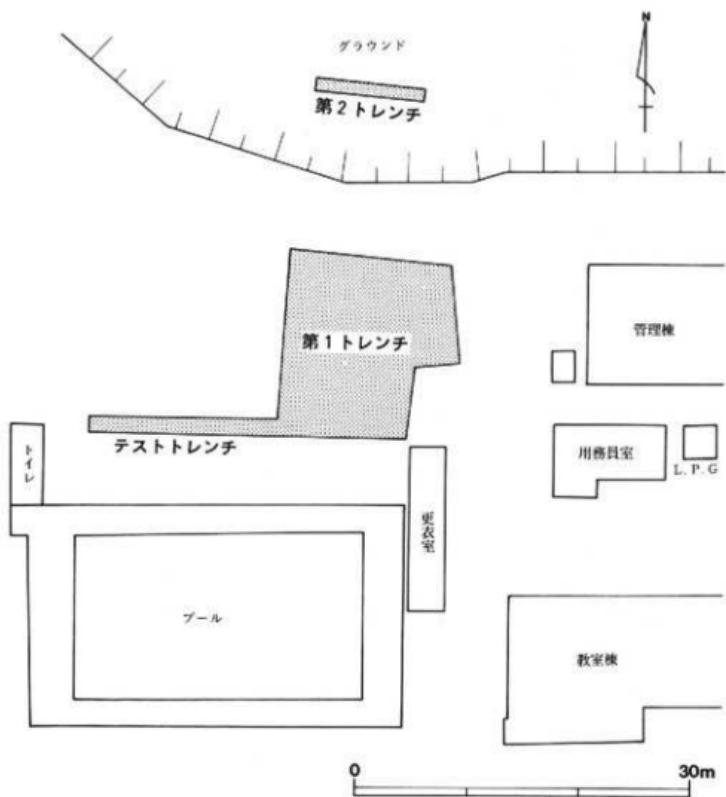
したがって、以下、第1トレンチの調査成果についてのみ記述する。

4. 層序と旧地形 (第3図)

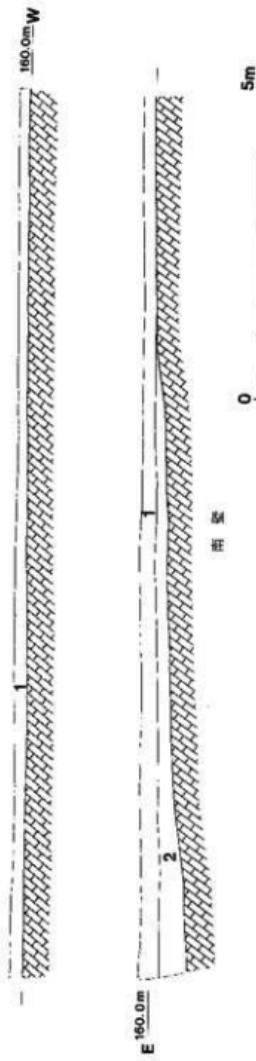
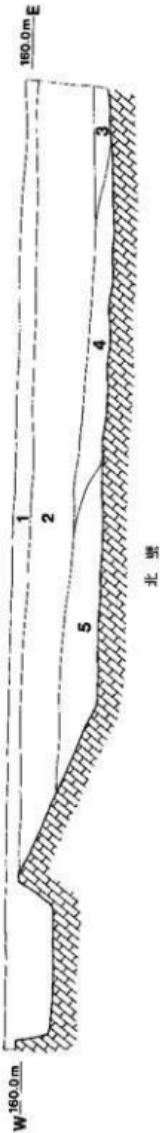
第1トレンチでは、既設体育館の基礎工事による擾乱層または取り壊しに伴う堆土が約25cmあって、以下、最大で120cmの厚みの包含層を経て地山に達する。包含層および地山は、既設体育館の工事に伴って西側の2/3は既に削平を受けている。

調査地は西から東へ延びる尾根上に相当し、緩やかに南から北に傾斜している。基本層序は、約20cmの擾乱層の下に最大120cmの包含層があり、地山に至る。地山は、人頭大の花崗岩・閃緑岩礫を多く含む黄褐色を呈する疊砂上である。包含層は、北壁では②暗灰褐色砂質土、③暗黄褐色砂質土、④褐黄色砂質土の3種が認められるが、遺物の包含頻度や状態に人差はない。南壁では、下層の③④層ではなく、②暗灰褐色砂質土のみがみられた。遺構は認められなかった。

包含層からの山上遺物には、布留式期から中世の土師器、古墳時代後期の須恵器等があり、それらが混在していた。上方（西側）からの流出土が堆積したものとみられる。



第2図 トレンチ配図



第3図 第1トレンチ 北・南壁 十回断面
1…標記層 2…明状細立歩質上 3…暗灰色砂質土 4…褐黃色砂質土 5…褐黃褐色砂質土

5. 出土遺物（第4・5回）

出土遺物は、いずれも第1トレンチ包含層（②～④層）出土の上器である。土石流による堆積のため、出土遺物には各層間の新旧差は認められなかった。これらは時期的には、古墳時代前期（1～9）、古墳時代から奈良時代（10～17）、中世以降（18～20）に大別できよう。

1～9はいずれも、ほぼ布留式期に相当するものと考えられる。このうち、1～4は甕の口縁部の破片である。1は残存約1/16からの回転復元で、口径21cmを測る。口縁端部の形態は、口唇部の面取りを行い外側に端面をもつものとなっている。口縁部外面の調整は、ヨコ方向および指頭による押圧、内面のそれはタテ方向およびヨコ方向のナデとなっている。また、頸部外面はタテ方向のハケ（10条/cm）により調整する。胎土内には、直徑2～3mmの石英を若干含み、2mm以下の長石および1mm以下のチャートを含む。色調は外面が暗褐色、内面および断面が淡褐色を呈する。焼成は良好。

2は残存約1/8からの回転復元で、口径14.6cmを測る。口唇部はやや外反して丸くおさめる。内外面ともにヨコ方向のナデにより調整し、端部にはやや強めのヨコナデを施している。胎土内には、直徑2～4mmの石英を僅かに含み、1mm以下の石英・長石・チャートを含む。また、雲母を若干含んでいる。色調は内外面および断面ともに淡褐色を呈し、焼成は良好。

3は残存約1/5からの回転復元で、口径14.4cmを測る。口縁端部はやや尖り気味に丸くおさめており、外面をヨコ方向のナデによって調整する。内面はヨコ方向のハケ（8条/cm）により調整している。胎土内に直徑3mm以下の石英、1mm以下の長石および雲母を含む。内面および断面は淡黄褐色、外面は褐色を呈する。焼成は良好。

4は残存約1/8からの回転復元で、口径18.4cmを測る。口唇部はやや内傾して丸くおさめ、内外面ともにヨコ方向のナデにより調整している。直徑1mm以下の石英をかなり含み、同程度の長石、雲母も含んでいる。内外面、断面ともに赤褐色を呈し、焼成は良好。

5～9は高杯の杯部の破片である。5は残存約1/10からの回転復元で、口径17.4cmを測る。口縁端部はやや外反して丸くおさめる。外面はヨコ方向のナデ、内面はヨコおよびナナメ方向のハケ（6条/cm）で調整している。直徑1mm以下の石英をわずかに含み、同程度の長石および雲母を含む。内外面、断面ともに赤褐色を呈する。焼成は良好。

6は残存約1/8からの回転復元で、口径17.0cmを測る。口縁端部はやや外反して丸くおさめる。内外面ともにヨコ方向のナデにより調整する。直徑2～3mmの石英をわずかに含み、1mm以下の石英・長石・雲母を含んでいる。内外面、断面ともに淡褐色を呈し、焼成は良好である。

7は残存約1/5からの回転復元で口縁部を欠損する。杯部と脚部の接合手法は挿入付加法である。杯部は内外面とも主としてタテ方向のナデ、杯底部内面は不定方向のナデにより調整する。また脚

部外面は指頭によるタテ方向のナデで調整している。直徑2~3mmの石英を含み、1mm以下の石英および長石をかなり含んでいる。雲母も若干含む。内外面、断面ともに赤褐色を呈し、焼成は良好である。

8は残存約1/4からの回転復元で口縁部を欠損する。杯部と脚部の接合手法は挿入付加法である。外面はタテ方向のハケ(8条/cm)、内面はタテ方向のミガキによって調整し、外面上には黒斑が認められる(アミ部分)。直徑1mm以下の石英・0.5mm以下の長石・雲母を含む。内外面、断面ともに淡赤褐色を呈し、焼成は良好である。

9は残存約1/15からの回転復元で、口径20.2cmを測る。口縁端部はやや外反し、口唇部は外側に面をもつ。口縁部と休部間に不明瞭な段を有する。口縁部の内外面と体部内面はヨコ方向のナデにより調整し、体部外面は摩滅著しいがタテ方向のハケが認められる。直徑1mm以下の石英・長石をかなり含む。内外面、断面ともに明赤褐色を呈し、焼成は良好である。

10~17は古墳時代から奈良時代に相当すると考えられる。そのうち10~13は上師器、14~16は須恵器である。10は壇口縁部の破片(残存約1/12)で、復元口径17.9cmを測る。口唇部は丸くおさめ、外面をヨコ方向のハケ、内面をヨコおよびナメ方向のハケ(いずれも10条/cm)により調整している。直徑1~2mmの石英・長石をわずかに含み、1mm以下の石英・長石・雲母を含む。内外面、断面ともに淡褐色を呈し、焼成は良好である。

11は舌状の把手で、最大厚2.6cmを測る。摩滅著しいが、指頭によるナデで調整している。直徑2~3mmの石英・長石をわずかに含み、1mm以下の石英・長石をかなり、同程度のチャートを若干含む。外面は淡赤褐色、断面は淡い暗褐色を呈する。焼成は良好。

12は土師器杯身(残存約1/8)で、復元口径15.0cmを測る。口縁部はわずかに外反し、口唇部を丸くおさめる。内外面ともにヨコナデにより調整する。直徑1mm以下の石英・長石・チャートを若干含む。内外面、断面ともに明黄赤色を呈し、焼成は良好。

13も土師器杯身(残存約1/6)で、復元口径11.8cmを測る。口縁部はわずかに外反し、口唇部をやや尖りぎみに丸くおさめる。外面の調整は、口縁部ヨコ方向のナデ、体部ヨコ方向のヘラケズリ、底部不定方向のヘラケズリで、内面はヨコナデにより仕上げる。直徑0.5mm以下の石英・長石・雲母をわずかに含む。内外面、断面ともに赤褐色を呈し、焼成は良好である。

14は須恵器高杯の杯部(残存約1/12)で、復元口径16.6cmを測る。口縁部は外反して伸び、口唇部も外反してやや尖りぎみに仕上げる。口縁部と体部の境の稜線は、強いヨコナデにより段を成す。口縁部外面および内面はヨコナデ、体部外面はヘラケズリ(クロクロ回転方向を廻り)により調整する。直徑2mm程度の石英をわずかに含み、0.5mm以下の石英・長石・チャートを若干含む。内外面、断面ともに淡青灰色を呈し、焼成は良好である。TK43型式期に相当するものであろう。

15は須恵器杯身(残存約1/2)で、復元口径10.0cm、器高3.3cmを測る。口縁部はやや外反しつつ、ほぼ垂直に立ち上がる。口縁部および体部の内外面はヨコナデによって調整し、体部と底部の

境界外面にはヘラケズリ（ロクロ回転方向右廻り）が残る。底部内面はヨコナデの後、中央部分のみタテ方向にナデしている。同外面は未調整。直徑1～2mmの石英・長石・チャートをわずかに含み、1mm以下の石英・長石・チャートを若干含む。内外面は青灰色、断面は赤紫色を呈し、焼成は良好である。飛鳥Ⅲ期の杯G⁽¹⁾に相当しよう。

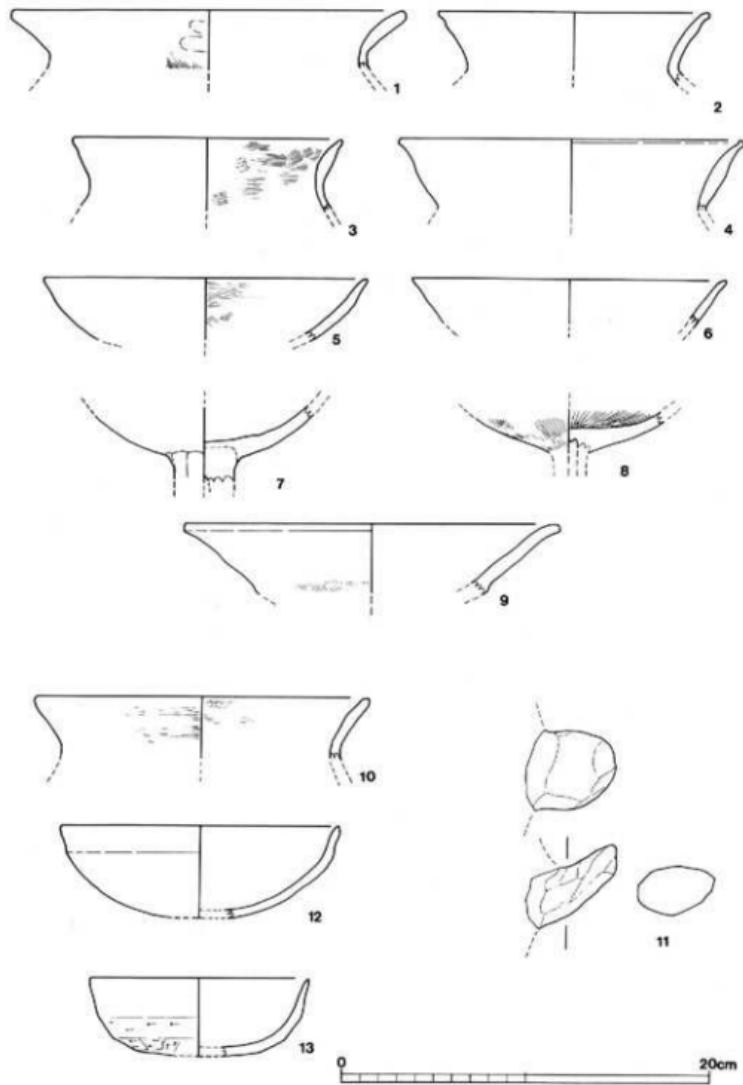
16は須恵器杯の底部（残存約1/4）で、高台部の復元径11.4cmを測り、高さ0.4cmの低い高台をもつ。体部内外面は回転ナデ（ロクロ回転方向左廻り）によって調整し、底部外面はヘラキリの後若干のナデ、同内面は体部との境は回転ナデ、中央部分は回転ナデの後不定方向のナデにより調整する。直徑2～3mmの長石を若干含み、1mm以下の石英・長石をかなり含む。内外面は青灰色、断面は淡赤紫色を呈し、焼成は良好である。飛鳥Ⅲ期の杯B⁽²⁾に相当しよう。

17は須恵器甕口縁部（残存約1/8）で、復元口径15.0cmを測る。頸部は短く外反し、口縁端部は外方に面をもちながら丸く仕上げる。内外面ともにヨコナデによって調整する。直徑3mm程度のチャートをわずかに含み、1mm以下の石英・長石・チャート・玄母を若干含む。焼成は良好。奈良時代のものであろう。

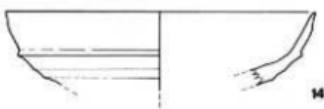
18～20は中世以降に相当すると考えられる。18は黒色土器碗の底部（残存約1/8）で、高台部の復元径9.6cmを測る。内面のみ炭素を吸着させている。高台は高さ0.9cmを測り、ナデによって端部を丸く仕上げる。内面はヨコおよびタテ方向のヘラミガキにより調整する。直徑1mm程度の石英・長石をわずかに含み、1mm以下の石英・長石を含む。内面は黒褐色、外面と断面は赤褐色を呈する。焼成は良好。奈良I-B期（10世紀中葉から11世紀初頭）に位置付けられよう。

19は土師器甕口縁部（残存約1/12）で、復元口径22.4cmを測る。口縁部は厚く、口唇部は丸みを帯びた面をもって仕上げている。内面はヨコナデ、外面も口縁端部近くはヨコナデ、頸部附近はタテ方向のハケ（10条/cm）により調整し、外面には黒斑が認められる。直徑2～3mmの石英・長石をかなり含み、1mm以下の石英・長石を多量に含む。内外面は淡赤褐色、断面は淡黒褐色を呈し、頸部外面に黒斑が認められる（アミ部分）。焼成は良好である。

20は上師器羽釜（残存約1/20）で、鉢の外径34.8cmを復元する。鉢から上方、口縁部に向かって内溝し、鉢は断面三角形で端部を丸く仕上げる。内外面ともにヨコナデにより調整する。直徑1mm以下の石英・長石・くさり鐵を含む。内面・断面および外面の鉢より下方は淡褐色、鉢およびこれより上方は暗褐色を呈する。焼成は良好。d2類あるいはd3類に相当し、14世紀前後に位置付けられよう。



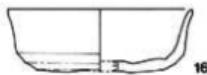
第4図 第1トレンチ出土遺物(1)



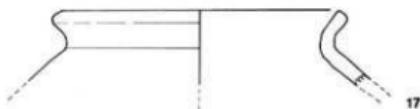
14



15



16



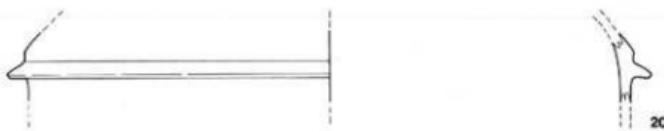
17



18



19



20



第5図 第1トレンチ出土遺物（2）

6. まとめ

佐田遺跡の調査は今回で7次を数えるが、未だ遺構の存在を確認できていない。特に今回の調査は、従来で最も広い面積の調査であったにも関わらず、地山の状態（人頭大の躰を多く含む疊砂土）からも遺構のある条件を満たしておらず、佐田遺跡は、その大半が上方（西側）からの流出土内に包含されていた遺物が堆積したことにより、遺跡として認知されているものとみられる。

佐田遺跡の上方（西側）には、近年、南郷遺跡の存在が知られるようになり、布留式期の住居跡を含む各種遺構や、後期古墳ならびに集落跡が検出されてつつある。この遺跡からの流出土が佐田遺跡の大部分を形成しているとみて大過ないであろう。

ただし、佐田遺跡の下方（東側）にあたる下茶屋遺跡では、現在継続中の試掘調査により、布留式期～古墳時代後期にかけての各種遺構が検出されつつあるので、上記のことにより、佐田遺跡の範囲内には全く遺構は存在しないと断定するのは早計である。南郷遺跡や下茶屋遺跡の一画が、佐田遺跡として認知されている範囲内にまで及んでいる可能性を予想できるからである。無論、周辺地区には集落遺構が知られるのに、佐田遺跡の範囲内にはほとんど遺構がみられないという事実も重要で、その理由の究明も今後の人大きな課題として残されている。

このように、佐田遺跡では遺構の存在こそ確認されていないものの、遺物は十器を中心大量に出土する。特に布留式期と古墳時代後期の遺物の密度が高く、従来ほとんど実態の知られなかったそれぞれの時期の南葛城地域の具体像を知るにあたって、佐田遺跡と周辺地区の調査は不可欠の情報を提供するであろう。

文献 証

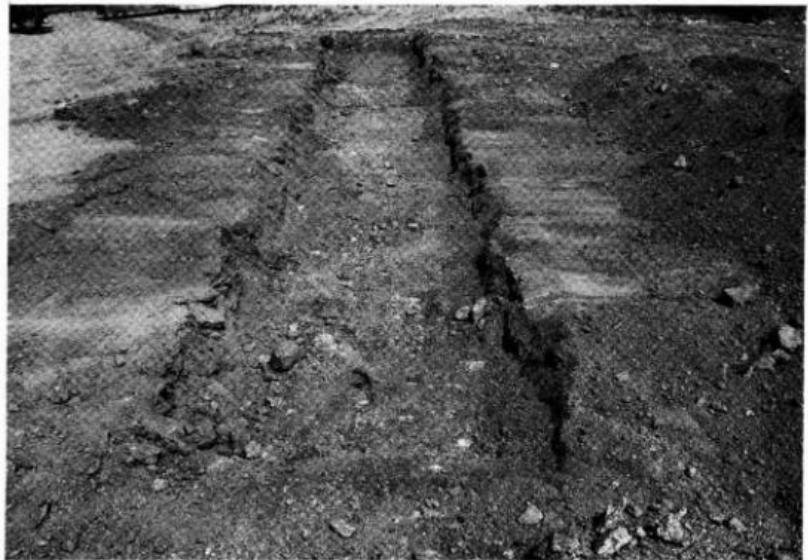
- (1) 木許 守「佐田遺跡範囲確認調査報告」(『御所市文化財調査報告書 第16集』、近刊予定)
- (2) 木許 守「中西遺跡・第3次発掘調査報告－平成2年度国庫補助金緊急調査の成果」(『御所市文化財調査報告書 第10集』、1991年)
- (3) 木許 守(前掲書(2))
- (4) 木許 守「佐田遺跡 第3次・第5次調査」(『平成3年度 個人住宅等建築に伴う市内遺跡発掘調査』『御所市文化財調査報告書 第13集』、1992年)
- (5) 木許 守(前掲書(4))
- (6) 木許 守(前掲書(1))
- (7) 田辺昭二「陶邑古窯址群 I」(『平安学園考古学クラブ研究報告』第4号、1966年)
- (8) 西 弘海「B 土器の時期区分と型式変化」(『飛鳥・藤原宮発掘調査報告 II』『奈良国立文化財研究所学報』第31巻、1978年)
- (9) 森下恵介・立石堅志「大和北部における中近世土器の様相－奈良市内出土資料を中心として－」(『奈良市埋蔵文化財調査センター紀要』、1986年)
- (10) 毛利光用子「布留遺跡 布留(西小路)地区出土の中世土器」(『考古学調査研究中間報告 11』、埋蔵文化財天理教調査団、1985年)

佐田遺跡周辺航空写真(東から)





1. 調査地全景（調査前；北から）



2. 第2トレンチ全景（西から）

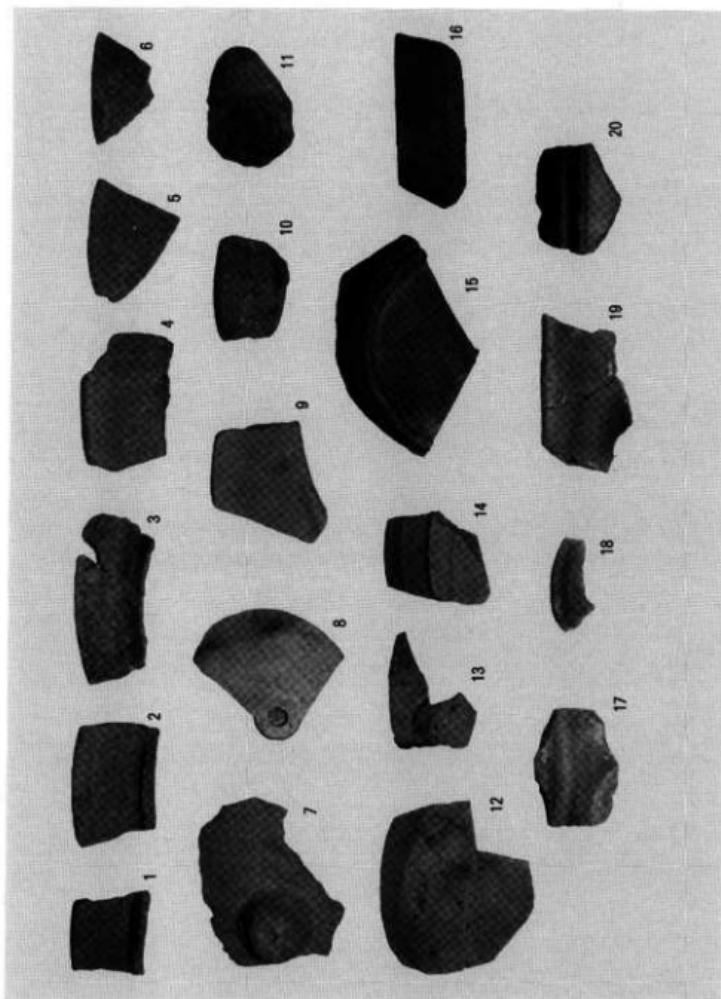


1. 第1トレンチ全景（東から）

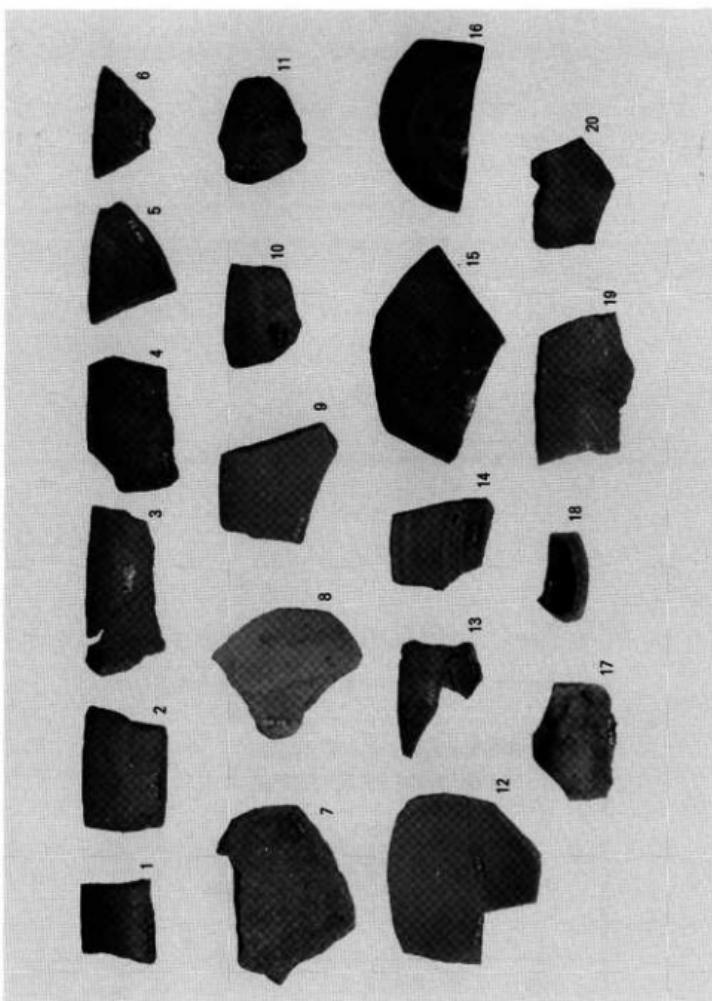


2. 第1トレンチ全景（西から）

第1 トレンチ出土遺物(外面)



第1 トレンチ出土遺物(内面)



奈良女子大学附属図書館

奈良県御所市

佐田遺跡第7次発掘調査報告書
御所市文化財調査報告書 第15集

平成5年(1993年)1月18日

編集・発行 御所市教育委員会
御所市三室 117番地

印刷 明新印刷株式会社
奈良市南京終町3-464番地